1. レポートの基礎

レポートは、作文や感想文とは違います。どのようにして書いたら良いのでしょうか。

どんな手順で書き始めたら良いでしょうか。

→ まず、**決められた字数（枚数）**を確かめ、それをしっかり守るようにしましょう。「○字程度」と指定された場合は、○字の±10%の範囲内で書くというのが基本です。また、「○字以内」と指定された場合は、上限字数のおおよそ90%以上は書くようにします。

次に何をすれば良いですか。

→ **テーマを決めます。**
といっても、先生からテーマを出される場合がほとんどですね。他方、ゼミなどでは、自分が決めて出す場合もあります。その場合は、「自分が書いてみたいテーマ」を決めます。
どちらにせよ、テーマが決まっていること、あるいは自分が決めること、それがレポートの出発点です。

テーマが決まったら、その次にどうしますか。

→ レポートは、**調べて**、その上で**考えなければ**、書けません。これが感想文や作文と一番違う点です。
感想文や作文は、「自分の思ったこと」「心に浮かんだこと」を書きますね。文章の上手下手や言い回し、叙述の順序、読み手を感動させたかどうか、などが勝負になります。
しかしレポートはくりかえして言いますが、「**調べて考えて書く**」文章です。これが作文や感想文、あるいはエッセイと大きく違う点です。

どのようにして何を調べはじめたら良いでしょう。

→ テーマが決まったら、その次に考えるのは、「**自分はどんな仮説を持っているか**」ということです。仮説などというと難しいことのようにみえるでしょう? しかしそんなに難しいことではありません。

仮説は次のような作業をとおして生まれてきます。

1. 講義では、そのレポート課題に関連することはどのように説明されていたのか**要約**してみて、
2. レポート課題に関連する他の文献や論文がないかを**探し**、
3. その文献や論文は、課題に対し**どのような見解・意見なのか**を読み取り、
4. また、その意見の**根拠は何か**を読み取り、
5. 様々な見解・意見を読んだ上で、自分としての意見や**考え（仮説）を持ち**、さらに**その根拠をはっきりさせ**てみる。

このようにすることで、レポート課題について「調べて考えて仮説を持つ」ことができます。

例えば、「円高が日本の貿易に与える影響について」というテーマの場合、次のようになります。

- このことについて先生は講義でこう説明された。しかし「影響」はそれだけだろうか。「影響」にはいくつかの側面があるはずだ。「歴史的な経緯」「別な角度からの影響」なども調べてみよう。
- 講義で説明された見解や意見はなぜ出てきたのだろう。背景や根拠を、資料を集めて自分で検討してみよう。
- なるほど、そういう歴史や影響があったのか。でも自分はこのことはこう思うのだが（仮説）。

「ほんとうはどうなのかなあ」「これまで知っていることだけで良いのかなあ」などと思う疑問や好奇心などが、仮説を生み出す母胎です。講義も漠然と聴くのではなく、普段から疑問を持ちながら聴くと良いでしょう。

©立教大学 大学教育開発・支援センター

調べながら考えて、自分の考え方や推論を立てれば良いのですね。

→ そうです。おもしろいことに、「本当にそうか?」「それだけではないのではないか?」など、疑問を持ち調べてゆくうちに、新しい考えが浮かんでくることもしばしばあります。

先へ進めば、卒業論文などがあってそう簡単ではありませんが、少なくとも1年次や2年次段階で「きちんとレポートを書く」ということに挑戦するには、これで良いのです。

ただし、疑問や考えだけで書けるものではないということはしっかり心得ておいてください。資料を集めたり、人の書いた本や論文、記事を探し出す作業が必要です。友人や先輩のアドバイスを聴くのも、良い方法です。

要するに「**仮説を持ち、調べるなかで、考える**」という三つの順序が必要です。

他にレポートを書く際に注意することはありますか。

→ 一番気をつけなければいけないことは、「言葉の定義」です。一つ一つの言葉の意味をしっかり考えながら書くことです。特にレポート課題の言葉は、定義をはっきりさせて使わなければなりません。

また、「○○とは、××である。」という言葉の定義について、さまざまな人の定義を文献から集めるだけでも一つのレポートになることもあります。言葉にこだわってレポートを書いてください。

レポートの最後の文章にいつも困ります。「終わりが締まらない」のですが。

→ 最後の部分のことを「結論」と言います。

結論というのは、「自分なりの仮説を持って、はたしてどうかと調べてみた。すると、私の知らないことがいろいろ分かり、また『こうではないかな』と思っていたことが実は的外れであることが分かった(あるいは当たっていたことが分かった)。それはこれこれこういうことだ」ということを、簡潔に書く文章です。

つまりレポートとは、「**仮説→調査(検証・情報収集など)→結論**」という流れを持つ論文のことです。

文章が下手なのでいつも困っています。上手な文章を書くコツはないでしょうか。

→ レポートには上手な文章や美しい言い回しなどは要りません。**筋が通っていること、つまり論理性があること**で十分です。そのためには、「しかし」「にもかかわらず」「なぜなら」「ところが」「さて」「したがって」「むしろ」といった接続の言葉を有効に使うことが大いに効果的です。(「5. レポートを論理的に書く」(p.12)参照)

また、文末表現や悪文を避けるためのポイントについては、「8. レポートの文章表現」(pp.17-18)を参考にしてください。

理系の学生です。実験レポートの書き方の指導を受けました。文系科目のレポートも同じ要領で良いですか。

→ 文系科目の書き方は、実験レポートとは、全く違います。このリーフレットには主に文系レポートの書き方が書かれていますので、文系科目のレポート作成時に活用してください。ただし、「仮説→実験→結論」という基本的な構造は理系でもおそらく共通しているので、実験レポートを書くときにも参考になるでしょう。

©立教大学 大学教育開発・支援センター